

令和元年8月30日現在

機関番号：42414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04414

研究課題名(和文) 未就学児の感情コントロールの発達を促す保育者による支援

研究課題名(英文) How Do Teachers Support Emotional Regulation of Preschool Children in Day Care Center?

研究代表者

加藤 邦子 (KATO, Kuniko)

川口短期大学・その他部局等・教授

研究者番号：40617784

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：保育所における不快感情の表出場面をとりあげ、保育者による対応を明らかにし、子どもの感情調整の発達を支える保育者の援助や保育効力感との関連を明らかにすることが目的であった。2018年11月～2019年1月に、東京都内、大阪府内公立保育所の保育者1511名に質問紙調査を実施した。その結果保育者は朝の受け入れ49%、着替えや身支度46%、保育活動・遊び場面59%、片づけ・切り替えの場面60%、午睡の寝入り・目覚め場面48%、子ども同士のトラブル時64%、不快時に対応していた。子どもの気持ちに寄り添う対応、具体的にどうすればよいかを示す対応、保護者への対応があるほど、保育者効力感が高まっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

未就学児の感情調整の発達については、従来母子間のアタッチメントだけが重視され、保育者による援助や関係性については無視されがちであった。コミットメントとは相互依存性理論に基づく、対象への動機づけの概念で、複数の対象について捉えることが可能である。

本研究は保育場面における未就学児の感情調整の発達をテーマとし、未就学児が他児や保育者など広い対象に対して不快感情を表出する場面を捉えたことから、「共に育つ」仲間関係への移行期の援助に関し、従来の概念の適用範囲を広げた。さらに未就学児の感情調整の発達を支えている複数の対象との関係を取り上げる必要性も示せたことから、今後の研究に寄与すると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study is how teachers of child care center or authorized center for early childhood education and care (Nintei kodomo en) support the preschoolers in showing their negative feeling for their emotional regulation. Eisenberg (2002) clarified that children who are prone to positive emotions relative to negative emotions, who are appropriately regulated in their social interactions, and who seek out rather than avoid or withdraw from others are more likely to be socially competent. We examined how the teachers of child care center commit to the children's negative emotion and support their development of emotional regulation. We collected the data of teachers in child care center who have held a full-time position in Tokyo and Osaka aged 21 to 66 years old. It is clear that the teachers' type of commitment to children's negative emotion have a positive impact on their efficacy in developing childrens' emotional regulation.

研究分野：臨床心理学

キーワード：保育所 アタッチメント コミットメント 未就学児 感情調整 発達 不快感情 保育者

様式 C-19, F-19-1, Z-19, CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本では共働き家庭が増え、さらに加速する IT 社会においては、養育者が乳幼児期にある子ども一人ひとりの気持ちに寄り添うことで発達すると考えられる社会情緒的発達が危ぶまれる。近年保育の必要度が高まり、発達早期から保育を受ける子どもが増加している。子ども同士の関係を築く際に、互いの感情調整が困難な現状があるものと考えられる。幼稚園等では、集団形成が難しい事例や、子ども同士のトラブルが親同士のトラブルに発展する例もある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、子どもの感情調整の発達を促す保育者の援助を明らかにすることである。とくに乳幼児期の子どもたちの集団保育場面をとりあげ、0～5歳児が保育場面に表出する不快感情に焦点をあて、保育者の援助とその機能について明らかにする。

3. 研究の方法

本研究で用いた概念として、まずアタッチメントとは、子どもが大人に対して、危機的な場面で保護と世話を確実に求めるための行動システムであり、単なる情緒的結びつき以上の意味をもつ。また、不快や不安に対して SOS を送れば必ず大人の保護と世話が得られるという安心感のもとに、探索が活発化することによって、子どもの発達機会を拡大する。安定したアタッチメントを形成することは、実質的な保護と世話が保障されるだけでなく、自分は安全であるという安心感を形成し、有能な自己感につながる。しかしながらわが国において、アタッチメントに関する言説にあまりにも多くの神話がある(近藤, 2013)。すなわち、母子間のアタッチメントだけが重視され、非親族と未就学児との関係におけるアタッチメントについては無視されがちである。こうした言説は、アタッチメント研究の中ではすでに否定されている。一方コミットメント(Rusbult, 1983)とは相互依存性理論に基づく、対象への動機づけの概念(加藤, 2007)で、複数の対象について捉えることが可能であり、アタッチメント理論と比較すると、より広い対象との関係を捉えることができる。したがって両概念の適用範囲を広げ、「共に育つ」仲間関係への移行期の援助に関する研究は、子どもが複数の対象と関係を維持し、感情調整の発達に寄与すると考えられる。

①保育所において、インタビュー調査を実施する。研究目的に合わせて乳幼児の保育場面における感情表出に関するインタビューガイドを作成した上で、フルタイムで勤務する保育者18名へのインタビュー(各1時間)調査を実施する。保育場面において乳幼児が不快感情を表出する場面を抽出し、保育者による発達援助あり方を質的研究によって明確化する。②調査結果をもとに、質問紙調査「乳児から5歳児の保育についてのお尋ね」を作成する。未就学児の感情調整の発達とその援助について、アタッチメント概念とコミットメント概念を用いて項目を作成した。具体的内容は、年齢、勤務先、勤務形態、保育所の規模、担当クラス、勤務経験年数、子どもやその保護者と関わる各場面において子どもが不快感情を表出した際への対応方法、西山(2006)を参考に作成した保育者効力感12項目、担当する子どもの関わりにくさの評価として、Parenting Stress Index (Abidin, 2005=2006)を参考に保育者の子ども評価9項目であった。調査の回答票は、データ入力の特許業者に入力を依頼した。無記名で回収した。③関東と関西の公立保育所・認定こども園に勤務する保育者約1500名から回答を得て、実証的に検討した。調査協力者のうちわけは、東京都内は810名、大阪府内は701名であった。協力者の年齢は29歳から51歳、経験年数は5年から30年までばらつきがみられた。また担当する子どもの年齢は、0歳児担当10%、1歳児担当16.2%、2歳児担当16.2%、3歳児担当11.9%、4歳児担当12.1%、5歳児担当11%であった。

4. 研究成果

インタビュー調査の結果、集団保育の体験は、親子関係から仲間関係への移行期にあたり、子どもにとって適応困難な場面を経験することもあり、その際子どもが保育者に不快感情という SOS を表出する。集団場面において乳幼児の不快感情の表出は、様々な場面において日常的に生じることが明らかになった。子どもたちは、保育者の援助が得られるという安心感によって、子ども同士の関係を形成し、集団において感情調整の発達が促されることが示唆された。

研究代表者が分担者とともに取り組んだ研究において、3歳児とその父親、母親(72組)の自由遊び場면을観察し、Ericksonら(1985)が作成した「自発性の尊重」尺度、「限界設定」尺度等を用いて、父母をいずれも高い群、「限界設定」のみ高い群、「限界設定」のみ低い群、3尺度いずれも低い群の4つのタイプに分類し、その子どもの集団場面での感情調整の程度を比較した。その結果、すべてが低い父親と限界設定のみ高い母親をもつ子どもの感情調整能力が、他の群と比べて有意に低くなることが確かめられた(加藤・近藤, 2007)。保育就園後には保育者の介入が必要になるケースが存在することが示唆された。子どもが不快感情や不安を訴える際に、保育者が子ども理解に基づき、感情調整の発達を促すような適切な援助を行う必要があると考えられる。子どもの感情調整の発達を促すために、保育所等における保育者の援助のあり方を検討する必要があると考えられる。

本研究において質問紙調査を実施し実証的に検討した結果、

- (1) 子ども同士の関係において、未就学児が不快感情を抱える場面では、保育者は子どもの気持ちに寄り添い、感情を代弁する、不快感情が生じた状況を説明するなどの援助を行うこと、
- (2) 保育者によるディリープログラムを円滑に進める上で、子どもの思いとディリープログ

- ラムとの間に齟齬が生じ、子どもが不快感情を表出する場面では、保育者が従来拠り所としている素朴理論によって援助内容が異なること、
- (3) 子どもの感情調整の発達を関係論的視点から援助する保育者、子どもの行動をコントロールすることを保育者の力量と捉え行動論的視点から援助する保育者、感情調整の発達という視点を伴わない保育者、に大別されること、
 - (4) 子どもへのコミットメント(かかわろうとする動機づけ)は高いものの、子どもの不快感情の表出を困ったこととして捉える保育者も存在することが明らかになった。

未就学児の感情調整の発達については、従来母子間のアタッチメントだけが重視され、保育者による援助や関係性については無視されがちであった。本研究ではコミットメントという、複数の対象への動機づけの概念を用いて捉えた。保育場面において未就学児が、他児や保育者など広い対象に対して不快感情を表出する場面を捉えたことから、「共に育つ」仲間関係への移行期の援助に関し、従来の概念の適用範囲を広げることができた。さらに未就学児の感情調整の発達を支えている複数の対象との関係を取り上げる必要性も示せたことから、今後の研究に寄与すると思われる。共働き家庭が増加するわが国において、多様な家庭で育つ乳幼児は集団場面において不快感情を表出するが、発達の契機となる重要なサインである。その際、保育者が柔軟な対応や適切な介入を行うことによって、未就学児の感情調整の発達を促すとともに、保育者自身の効力感を高めることにも関連していることが示唆されたことは本研究の成果である。さらに従来の国内外の研究では、感情調整の発達は養育者—子どもの親子関係で育まれるとされてきたが、子どもの感情調整の発達を保育者—子ども関係でみることの重要性について明らかにしたことの意味は大きい。

<引用文献>

- ① Abidin, R. R., 2005, Parenting Stress Index, Psychological Assessment Resources, Inc., 兼松百合子他著, 2006, PSI 育児ストレスインデックス手引き, 一般社団法人 雇用問題研究会.
- ② Erickson, M. F., Sroufe, L. A., & Egeland, B., The relationship between quality of attachment and behavior problems in preschool in a high-risk sample. In I. Bretherton, & E. Waters (Eds.), Growing points of attachment theory and research. 1985, Monographs of the Society for Research in Child Development, Vol. 50:147-166. Chicago: The University of Chicago Press.
- ③ 加藤邦子・近藤清美, 「3歳児における父子と母子の遊びタイプの比較」, 発達心理学研究, 第18巻, 2007年: 35-44.
- ④ 加藤邦子, 「父親, 母親が子どもへのコミットメントを維持する要因分析」家族社会学研究 Vol. 19.No. 2, 2007年, :7-19.
- ⑤ 加藤邦子・近藤清美 「保育所の3歳未満児における感情調節 その1. 子どもの不快感情の表出と感情調節」日本心理学会第81回大会 論文集, 2017年
- ⑥ 近藤(池邨)清美. 母子関係をとらえる視点: アタッチメント理論の原点に戻って. 生涯発達心理学研究(白百合女子大学生涯発達研究教育センター紀要), 5号, 2013年. 29-39.
- ⑦ 西山修, 幼児の人とかかわる力を育むための多次元保育者効力感尺度の作成, 保育学研究, Vol. 44, 2, 2006年 150-160.
- ⑧ Rusbult, C. E. A longitudinal test of the investment model: the development (and deterioration) of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. Journal of Personality and Social Psychology, 45, 1983年, 101-117.

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計 6件)

- ① 加藤邦子, 共働き世帯の父親のITの育児利用が未就学児の社会情緒的発達の父親評価に及ぼす影響—日・韓・米・スウェーデンの国際比較, IT社会の子育てと家族・友人関係: 日本, 韓国, 米国, スウェーデンの国際比較から 科研研究成果報告書:13-20. 2019年
- ② 加藤邦子, 第一生命財団子育て・子育ての地域援助システムの研究—ジェネラティブティに関するインタビュー調査 から 調査研究報告書, 2018年
- ③ Kondo-Ikemura, K., Behrens, Y. K. Umemura, T. & Nakano, S., Japanese mothers' prebirth Adult Attachment Interview predicts their infants' response to the Strange Situation Procedure: The strange situation in Japan revisited three decades later, Developmental Psychology, 54:2011-2015. (査読有り), 2018年

[学会発表] (計 8件)

- ① 加藤邦子・近藤清美, 保育園児の感情調整の発達を促す保育者の援助: 場面による子どもの不快感情の表出とその対処, 日本心理学会第83回大会, 2019年.

- ② Kuniko KATO, The Impact of Parents' ICT Use for Childcare on their Evaluation of Children's Socio-Emotional Development- A Comparison of Dual-Earner Families in Japan and the U.S.A., Society for Research on Child Development Biennial Meeting2019, 2019年.
- ③ 加藤邦子・近藤清美・坂上裕子・服部敬子, 3歳未満児の感情調節の発達を促す援助一家庭と保育所の文脈における共通性と差異一, 日本発達心理学会第29回大会, 2018年
- ④ 加藤邦子・近藤清美, 保育所の3歳未満児における感情調節: その1. 子どもの不快感情の表出と感情調節, 日本心理学会第81回大会, 2017年.
- ⑤ 近藤清美・加藤邦子, 保育所の3歳未満児における感情調節: その2. 保育所の3歳未満児における感情調節: その2. 感情調節に見られる保育者の素朴理論, 日本心理学会第81回大会, 2017年.

〔図書〕(計 2件)

- ① 青木紀久代編著, 加藤邦子, みらい, 2019年, 191頁「子ども家庭支援の心理学」, 第8章 多様な家庭形態とその理解 (128-142頁) .
- ② 青木紀久代編著, 加藤邦子, みらい, 2019年, 191頁「保育の心理学」, 第8章 乳幼児期の学びに関わる理論① 愛着 (124-139頁) .

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0件)

名称:
 発明者:
 権利者:
 種類:
 番号:
 出願年:
 国内外の別:

○取得状況 (計 0件)

名称:
 発明者:
 権利者:
 種類:
 番号:
 取得年:
 国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 近藤清美

ローマ字氏名: Kiyomi IKEMURA

所属研究機関名: 帝京大学

部局名: 文学部

職名: 教授

研究者番号 (8桁):

80201911

(2) 研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。